

悲しいだけ

藤枝静男

悲しいだけ

藤枝静男

講談社

悲しいだけ

昭和五十四年二月十五日 第一刷発行
昭和五十四年四月十六日 第三刷発行

著者——藤枝静男

© Shizuo Fuzieda 1979, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三一九四一二二(大代表) 振替東京二二五三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

目次

滝とビンズル	5
在らざるにあらず	23
出てこい	89
雛祭り	107
悲しいだけ	129
庭の生きものたち	155
雉鳩帰る	191
半僧坊	221
あとがき	248

装帧
辻村益朗

悲
し
い
だ
け

滝とビズル

私の住んでいる東海の中都市には、市役所と税務署の頭のすぐ上の丘にコンクリート製の小さな城ができていて、崖下は動物園、美術館、学校、体育館、プールなどでとり巻かれている。百貨店食堂に寿司、ビフテキ、ハンバーグがあるようにである。今はもちろん街の真中になっているが、昔で云えば広大なる三方ヶ原台地の西の突端である。家康はこの反対側の東の端で自分から仕掛けた戦いに負けて逃げ、門を明けはなしたまま篝火を焚いて戦死する気になっていたところ、敵の信玄は放置して西に向かったので助かったのである。家康の逃げ帰った道途にはそれぞれにそれらしい町名が残っていて戦前戦中は陸軍航

空隊や渡洋重爆部隊や通信学校になっていたが、戦後の今は自衛隊の南北基地、オートレース場、そしてその他の大部分は引揚者用開拓地として提供されたのち変身して型通りの団地住宅地となって繁栄しつつある。「満州道路」などという名残りの郷愁道路はある。

基地の裏側には、一段低くなって山林にかこまれた離村の部落跡がある。頭上の轟音に怯えたせいもあっただろうが、実際に戦闘機が墜落したこともある。私がそこを横断するのは日曜祭日にかぎられているからあたりは非常に静かで、屋敷なりの庭木に区切られた空地や、消滅しかけの畦をのこして雑草に埋まった田圃のあとが一面の光を浴びている。こういう光景は何と云っても異様である。だからどうだというのはないが、すべてが余りに型通りだと厭世的になることもある。

そういうふうなあちこちの原を抜けて、ある日の午後、台地のなかほどから

少し入った山間の淋しい古寺に行ってみた。戦前は時々小学校遠足用の行楽地にもつかわれていたという臨済の寺で、奥にある不動の滝というのが名所となっているのだが今は行く人はない。私が訪ねる気になったのは、この滝を水源とする川が平野に落ちて曲りくねった末に街を貫いて遠州灘のすぐ手前で天竜川へ流れこんでいると聞いて好奇心を起こしたからである。

そこで丘のすぐ近くまで迫っている団地を越し、狭い早春の田を横切って登って行ってみると、本堂の後ろの低い崖から垂れている水は滝という景観ではなくて太めのゴムホース二本分程度のものであった。そのむかし靈驗あらたかであったという伝説の滝はだいたいどこでもこのくらいのものである。だいいち文覚ではあるまいし病体の男女の頭や肩が打たれて耐え得る水圧がこれ以上であるはずもないのである。そうは思ったものの、浅くてせまい滝壺の岩の下窪みに七、八センチの蝶蛭二、三匹がはりついている貧相なさまを見ると私

はやっぱり失望した。無論水源なんかではなくて、川は川ではじめから別個にその先きの方から相当の幅と水量で団地と田圃のあいだを流れていた。

寺の正面にまわると、荒れてはいるが屋根も広く階段も高く構えも大きい本堂が、古い杉木立に囲まれて薄暗く蟠踞していた。墓地が見あたらないところを見るとやはり信仰だけで葬式は営まぬ寺であるらしく、堂内は剥げ落ちた古い押絵の大絵馬や日清日露の扁額で埋められ、本尊は高い厨子の奥で暗くて眼が届かなかった。

大きくてがっしりとした基壇から離れて、外陣の横手の壁ぎわにビンズル尊者が押しつけられたような恰好で坐っていた。ビンズルにしては珍しく、木綿の大黒帽と色の褪せた麻の帷子を着せられているので、もう長いことお役御免になっているのだらうと思った。ずり落ちそうな上衣と傾いた大黒帽の下から、肋の浮かんだ胸と、縦皺の深く刻みこまれた瘠せ顔と、白っぽく濁った玉

眼がのぞいているのが哀れに思われた。

少年時代から眼科医者となった戦前のころまで、ビンズルは謂わば寺の要員であつた。本尊が釈迦であつても薬師であつても観音であつても、いちおうそちらを拝みおわつた参詣人はこの一人きりで隅に坐っているビンズルの前に立ち寄り、自分の病める頭や顔や足腰に触れたのち同じ彼の頭や顔や足腰を撫でさすつて歸つたのである。そのころ私の開業していた農漁村の患者の三分の二はトラコーマであつた。つまりヤニ目とか赤目とか云う外見そのままの不潔な名前で呼ばれて、失明の有力原因となつていた執拗な慢性伝染病の持ち主であつたから、医者である私にとっては、この難病の要らざる伝播者ビンズルの存在はいつも眼ざわりであつた。同時に何万回となく撫でられてテラテラな黒光りを放つ全身は、薄暗い堂内で無気味にも幼稚にも醜悪にも見えた。実際にも彼はいつも一階級下の除け者らしく、つまり本尊が名目だけにせよ一刀三礼で

彫られているとすれば、彼だけは半人前に彫られていた。

この寺のビンズルもやはり粗末であつたが、しかし私の眼には柔和に映つた。退役して、さすられる機会もなくなった彼の膝前は埃で白く覆われていた。

彼の身分は、正式には十六羅漢の第一席、ヒンズーの医療の神、賓頭盧尊者である。黒いのは手垢のためで本来の体色は赤である。彼が活躍していたころ、インドの大長者が毎年末法の人のために齋会を設けて、釈尊をかしらに菩薩羅漢の全員を邸に招待して供養していた。もちろんビンズルも招かれていたが、横着な性質だったのでその度に法力を用いて途中の山や川をとり除けて御馳走だけをまねき寄せ、鰯腹飲み食いして酔払って真赤になっていた。それでとうとう釈尊が怒って「未来永劫おまえだけは仏にしてやらぬぞ」と宣告したので、今だに羅漢のままの姿で仲間はずれとなり、外陣で差別待遇を受けてい

るのである。そういうことになっている。

しかしそれよりもつと逆のぼった太古の彼の本来の役目は糞尿取扱い神であつたという説もある。病気を排泄物によつて見分けるといふ手続きから云つても、獣糞を日常必須の生活密着物とする風土からみても、これは真実かも知れない。何れにせよ汚いような神である。なんだか自分に似たところがあるような気がして可笑しくなることもある。

不動の滝は全国的にほとんど普通名詞化しているのだからこの附近だけでも三つくらいはある。なかのひとつは秋葉ダム上流の西岸に連なる標高八百メートルから千メートルの山々の間にはさまれたあたりに掛かつていて、水量も多く、五十メートルを一気に落下して見事だといふ話であつた。三方ヶ原台地の貧弱なそれに失望した数日後にこのことを耳にしたのですぐ行くことにした。ちやうど日曜日でもあつた。

天竜川に造られたダムは、長野県との県境間近の佐久間ダム、それから下つて竜山村に秋葉ダム、もひとつ下流の平地に近い二俣の手前に現在建設中の船明（ふなぎら）ダムと、三つある。船明は戦争末期に召集された友人の一等兵本多秋五が陣地構築のために駐屯し敗戦を迎えた山間の寒村であるが、三十年たった今では工事開始のおかげもあり、二俣の街の不断の膨脹に接続の気配もあつて、道路の両側はほぼ人家でつながっている。大工の伴が始めたという流行の「古美術店」さえできた。私も半分はガラクタ漁りの中毒で素通りはできず、仕事場を片付けて三方にお手のものの棚をとりつけた小店に入って、徳利や皿を二つ三つ手にとって眺めたのち頭を打ちそうな中二階を覗いてみたが、売物にもならぬ虫喰い簞笥やボロ合羽や紐のとれた軸物や禿げちよろけの三河盆が雑然と押しこめられているだけで問題にはならなかった。

「会で品物を仕入れてくるとか云って朝から浜松へ出てます。主人がいれば何